

様式6（第15条第1項関係）（採択年度＝平成26年度以降）

平成27年 4月 10日

独立行政法人 日本学術振興会理事長 殿	研究機関の設置者の所在地	〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1	
	研究機関の設置者の名称	国立大学法人 東京外国語大学	
	代表者の職名・氏名	学長 立石 博高 (記名押印)	
	代表研究機関名 及び機関コード	東京外国語大学	12603

平成26年度戦略的国際研究交流推進事業費補助金  
実績報告書

戦略的国際研究交流推進事業費補助金取扱要領第15条第1項の規定により、実績報告書を提出します。

整理番号	J2601	補助事業の 完了日	平成27年 3月31日	関連研究分野 (分科細目コード)	ヨーロッパ史・アメリカ史(3304)
------	-------	--------------	-------------	---------------------	--------------------

補助事業名（採択年度） 境界地域の歴史的経験の視点から構築する新しいヨーロッパ史概念（平成26年度）	補助金支出額（別紙のとおり） 12,032,712円
---	-------------------------------

代表研究機関以外の協力機関 なし
---------------------

海外の連携機関 ©International Cultural Centre (Krakow, Poland)/Central European University (Budapest, Hungary)/Department of History and Civilization, European University Institute (Firenze, Italy)
---

1. 事業実施主体

フリガナ 担当研究者氏名	所属機関	所属部局	職名	専門分野
主担当研究者 シノハラ タク 篠原 琢	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	中央ヨーロッパ 近現代史
担当研究者 カナイ コウタロウ 金井 光太朗	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	アメリカ合衆国史
チバ トシユキ 千葉 敏之	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授	ヨーロッパ中世史
ソウマ ヤスオ 相馬 保夫	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授・副学長	ドイツ現代史
ハヤシ カヨコ 林 佳世子	東京外国語大学	大学院総合国際学研究院	教授・副学長	オスマン帝国史
計5名				

フリガナ 連絡担当者	所属部局・職名	連絡先（電話番号、e-mailアドレス）
イノウエ ノリカズ 井上 憲和	研究協力課研究協力係・係員	TEL：042-330-5593 E-mail：kenkyu-kenkyo@tufs.ac.jp

## 2. 本年度の実績概要

今年度は10月期からプログラムが開始されたため、最初の一ヶ月は海外の連携研究機関との調整に費やされた。その後、日本側研究グループの研究課題を確認し、全体として研究プロジェクトを構成するために、研究グループの若手研究者を中心とする研究報告会を行った。その概要は以下の通りである。

第一回研究会（2014年11月29日、東京外国語大学府中キャンパス）

篠原 琢：「境界地域のナショナリズム-中央ヨーロッパの近代」

福嶋千穂：「17世紀前半リトアニア大公国の殉教聖人ヨサファト」

鈴木健太：「社会主義体制末期の民衆運動とナショナリズム-ユーゴスラヴィアからみる東欧革命」

第二回研究会（2015年1月12日、東京外国語大学本郷サテライト）

巽由樹子：「帝政末期のロシア語出版と非ロシア人企業家」

伊東剛史：「近代イギリスにおける「痛み」と「感情」」

久米順子：「イベリア半島の中世美術史を考える—その成立と発展、実証的作品研究—」

小田原琳：「近代イタリアにおける地理的／「人種」的境界」

海外の連携研究機関とはブダペシュトの中央ヨーロッパ大学で一回、本学で一回、国際セミナーを開催することができた。概要は以下の通りである。

第一回国際セミナー（2015年3月9日、中央ヨーロッパ大学）

Japan Looks at Europe

Chair: Prof. Matthias Riedl

Yukiko TATSUMI: The representation of the Tsar and the commercial press in late imperial Russia.

Takashi ITO: An indispensable urban amenity? Zoos in the modern world.

Taku SHINOHARA: The East as a site of social experiments. Exclusion of the East from the European "normality"

第二回国際セミナー（2015年3月30日、東京外国語大学本郷サテライト）

The West and the East in European History

Chair: Taku Shinohara

Pavel KOLÁŘ (European University Institute): "Beyond the Cold-War Paradigm: Towards a Comparative History of State Violence in Europe after 1945"

Matthias RIEDL (Central European University): "Europe - Occident - Latin West: Symbols of Borderland Experience".

Discussants: Satoshi KOYAMA (Kyoto University), Rin ODAWARA (Tokyo University of Foreign Studies)

このほか、ヨーロッパ史とオスマン史の境界領域について研究を強化するため、イスタンブールのトルコ文化センター、イスタンブール・セhil大学との共催で、2015年2月13日、イスタンブールにおいて「危機にある文化遺産」というタイトルで国際会議を行った。ここでは篠原が Authenticity and originality in historical contexts: experience in Europe and in Japan という報告を行った。

若手研究者の派遣は、予定どおり、巽由樹子、鈴木健太を中央ヨーロッパ大学（ブダペシュト、ハンガリー）に、福嶋千穂を国際文化センター（クラクフ、ポーランド）に派遣し、それぞれ研究を継続している。

### 3. 到達目標に対する本年度の達成度及び進捗状況

本研究は、東部ヨーロッパ、および地中海地域を中心とするヨーロッパ境界地域の歴史的経験に焦点を当てながら、共同研究によって新たなヨーロッパ史の概念を構築することを目的として掲げ、従来のヨーロッパ研究の問題点として次の三点をあげた。

1. 目的論的歴史像：ヨーロッパ史の発展は、普遍的な人類史的価値の実現を体現するものとして目的論的に構想されてきた。現在でも、この規範的歴史像がヨーロッパ研究に統合性を与えている。
2. 国民的学術研究の束：ヨーロッパでは 19 世紀の半ば以降、学術研究、特に人文社会科学は国民国家／国民社会のプロジェクトとして制度化、組織化され、それぞれに精緻な知の体系を築きあげてきた。その結果、ヨーロッパ研究は、国民的学知の束として構成され、比較研究の場合の比較の単位も、また交流史の場合の交流の拠点も、国民社会を前提とすることが多い。
3. 東と南の境界地域の排除：ヨーロッパ研究は西欧社会を中心に構想され、東と南の境界地域の経験はヨーロッパ研究に組み込まれることが少なかった。とりわけ、東欧についてそれは当てはまり、これは直接には冷戦期の知的配置の結果であるが、その起源は啓蒙期に生まれたヨーロッパ像にある。

本年度はこの問題意識を研究チーム、海外の連携研究機関の研究者と共有し、ヨーロッパ史概念を再構築するための準備にあてるべく計画を立てた。若手研究者を中心とする研究会では、各自の研究課題を全体の課題にすり合わせるべく議論を行ったが、近世史から現代史にわたる様々な個別テーマのそれぞれに、共通の問題意識が反映されるものとなった。

海外研究機関との研究会は計画より 2 回多く開催することができた。とりわけ「ヨーロッパ史の東と西」と題する第二回目の国際研究会では、上記の 3. の問題を直接扱うものであり、研究に大きな進展をもたらすこととなった。マティアス・リードル氏の報告は、中近世の政治思想史に即して、ヨーロッパ史における「西」の意味づけを扱ったものである。ローマ・カトリックが宗教的中核であった中近世のヨーロッパにおいて、カトリック世界としての普遍性と、「西」という限定された空間的・地理的概念とは癒着していた。現実には 13 世紀までビザンツ世界は、西欧に対して文明的・知的に圧倒的な優位に立っていたにも関わらず、宗教的普遍性を代弁する帝國的政体が、その領域的限定性（「西」）を普遍性に投影したのである。ヨーロッパ概念のこの構築性は、驚くべき持続性を持って、今日まで続いている。パヴェル・コラーシ氏の報告は、ヨーロッパ史概念から「東」がもっとも疎外された冷戦期について、死刑制度に注目しながら、国家暴力の行使という観点から考えた場合の、「東」を有機的に包括したヨーロッパ史叙述の可能性を提起した。これらの報告は、本プロジェクトを進める上で、本質的に重要な貢献となった。

イスタンブルにおける国際会議は、文化遺産概念に端的に現れた歴史認識のあり方に焦点を当てて、ヨーロッパ史とオスマン史との仲介を試みた。バルカン権力としてのオスマン帝国は疑いなくヨーロッパ史の一部を構成しながら、伝統的にはヨーロッパ史から疎外されてきた。今回の会議は、オスマン史を一部とするヨーロッパ史の再構築をはかる作業の第一歩となった。

当初の予定では 10 月期に事業が始まった本年度は、プロジェクト全体のセットアップ期間と位置づけたが、上記のように、予定を超えて、大きくプロジェクトを進展させることができた。

#### 4. 日本側研究グループ（実施主体）の研究成果発表状況（本年度分）

##### ①学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文又は著書

論文名・著書名 等	
<p>（論文名・著書名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。）（以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・査読がある場合、印刷済及び採録決定済のものに限って記載して下さい。査読中・投稿中のものは除きます。</li> <li>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</li> <li>・著者名について、主著者に「※」印を付してください。また、主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付してください。</li> <li>・海外の連携機関の研究者との国際共著論文等には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共著論文等については番号の前に「○」印を付してください。</li> </ul>	
1	篠原琢「バリケード上のアマゾネス—1848年革命の女性像」、吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編（篠原ほか19名著）『画像史料論—世界史の読み方』東京外国語大学出版会、2014年、200-203頁、査読なし。
2	金井光太朗「アメリカン・システムのマニフェスト—ヨーロッパ公法秩序とモンロー・ドクトリン」、『アメリカ研究』49号、2015年、1-19頁、招待論文。
3	Kotaro KANAI, “The Two Concepts of Constitutionalism and the Popular Sovereignty: A Comment on Prof. Gray’s “Borderland in the Heartland,” 『同志社アメリカ研究 別冊』22号、2015年、査読無し。
4	吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編著『画像史料論—世界史の読み方』東京外国語大学出版会、2014年、325頁。
5	千葉敏之「画像史料とは何か」、吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編（千葉ほか19名著）『画像史料論』東京外国語大学出版会、2014年、10-25頁、査読なし。
6	千葉敏之「聖画像の造像と破壊—イコノダリズムとイコノクラスム」、吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編（千葉ほか19名著）『画像史料論』東京外国語大学出版会、2014年、122-151頁、査読なし。
7	千葉敏之「ジャック・ルゴフの銀河系」、『思想』1083号、2014年、139-143頁、査読なし。
8	千葉敏之「書評 藤井真生著『中世チェコ国家の誕生—君主・貴族・共同体』（昭和堂、2014年）」、『東欧史研究』37号、2015年、60-67頁、査読なし。
9	木村靖二・千葉敏之・西山暁義編著（ほか9名）『ドイツ史研究入門』山川出版社、2014年、479頁（千葉担当：3-12、14-64、299-318、331-352、459-464頁）、査読なし。
10	近藤和彦編（千葉敏之ほか11名著）『ヨーロッパ史講義』山川出版社、2015年5月刊行予定、総頁数未確定（千葉担当：34-56頁）、査読なし。
11	相馬保夫「記念碑に見るホロコーストの歴史と記憶—ポーランドとドイツの強制収容所跡記念碑・記念施設を中心に」、吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編（相馬ほか19名著）『画像史料論』、東京外国語大学出版会、2014年、158-175頁、査読なし。
12	相馬保夫「二つの世界大戦」、木村靖二・千葉敏之・西山暁義編（相馬ほか11名著）『ドイツ史研究入門』、山川出版社、2014年、151-176頁、査読なし。
13	相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織（14）」、『東京外国語大学論集』88号、2014年、237-256頁、査読なし。

14	相馬保夫「離散と抵抗：ズデーテン・ドイツ社会民主党亡命組織（15）」、『東京外国語大学論集』89号、2014年、195-215頁、査読なし。
15	小杉泰・林佳世子編『イスラーム 書物の歴史』、名古屋大学出版会、2014年、453頁。
16	林佳世子「オスマン朝社会における本」、小杉泰・林佳世子編（林ほか 15 名著）『イスラーム 書物の歴史』、名古屋大学出版会、2014年、253-278頁。
17	林佳世子「イスラーム世界と活版印刷」、小杉泰・林佳世子編（林ほか 15 名著）『イスラーム 書物の歴史』、名古屋大学出版会、2014年、352-374頁。
18	久米順子「ベアトゥス写本挿絵にみる中世イベリア世界」、吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編（久米ほか 19 名著）『画像史料論』、東京外国語大学出版会、2014年、28-48頁、査読なし。
19	巽由樹子「19世紀後半サンクトペテルブルグにおけるポーランド人の出版活動——地理書『絵のように美しいロシア』の刊行をめぐる」、橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人——大学・学知・ネットワーク』、昭和堂、2014年、197-220頁、査読なし。
20	巽由樹子「19世紀後半ロシアの出版メディアとポピュラー・サイエンス——帝政末期の通史を再考する手がかりとして」、『科学史研究』53巻 272号、2015年、446-453頁、査読なし。
21	福嶋千穂「近世ルテニアの啓蒙・教育活動と宗派共同体——「正教スラヴ」ネットワークの中で」、橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人——大学・学知・ネットワーク』、昭和堂、2014年、222-243頁、査読なし。
22	伊東剛史「近代科学の「周縁」——19世紀イギリスにおけるジェントルマン科学と気候順化」、『専修大学人文科学研究所月報』275号、2015年、17-37頁、依頼による執筆・査読なし。
23	伊東剛史「帝国・科学・アソシエーション——「動物学帝国」という空間」、近藤和彦編（伊東ほか 11 名著）『ヨーロッパ史講義』山川出版社、2015年5月刊行予定、147-166頁、査読なし。
24	伊東剛史「ロンドン動物園と科学史の演劇性」、『科学史研究』53巻 272号、2015年、437-442頁、査読なし。
25	伊東剛史「19世紀ヨーロッパのポピュラー・サイエンス」、『科学史研究』53巻 272号、2015年、431-432頁、査読なし
26	Masako Suzuki, Takashi ITO, “United Kingdom,” GWEC Editorial Working Committee (ed.), <i>A General World Environmental Chronology</i> , Tokyo: Suirensa, 2014, pp. 565-572.
27	鈴木健太・山崎信一・亀田真澄・百瀬亮司『アイラブユーゴ 1——ユーゴスラヴィア・ノスタルジー 大人編』、社会評論社、2014年、176頁。
28	百瀬亮司・亀田真澄・山崎信一・鈴木健太『アイラブユーゴ 2——ユーゴスラヴィア・ノスタルジー 男の子編』社会評論社、2014年、176頁。
29	亀田真澄・山崎信一・鈴木健太・百瀬亮司『アイラブユーゴ 3——ユーゴスラヴィア・ノスタルジー 女の子編』社会評論社、2015年、184頁。

## ②学会等における発表

発表題名 等	
<p>(発表題名、発表者名、発表した学会等の名称、開催場所、口頭発表・ポスター発表の別、審査の有無、発表年月(西暦)について記入してください。)(以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。)</p> <p>・発表者名は参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること。共同発表者がいる場合は、全ての発表者名を記載し、主たる発表者名は「※」印を付して下さい。発表者名について主担当研究者には<u>二重下線</u>、担当研究者については<u>下線</u>、若手研究者については<u>波線</u>を付して下さい。</p> <p>・口頭・ポスターの別、発表者決定のための審査の有無を区分して記載して下さい。</p> <p>・さらに数がある場合は、欄を追加して下さい。</p> <p>・海外の連携機関の研究者との国際共同発表には、番号の前に「◎」印を、また、それ以外の国際共同発表については番号の前に○印を付して下さい。</p>	
1	篠原琢「複合的パトリアから全体論的ネーションへ——近世から現代への見通し」、第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB2「境界地域における愛国主義とナショナリズム」、2014年6月、立教大学(東京)、口頭発表、審査あり。
2	篠原琢「祖国をめぐる変奏曲——ベーメン・ドイツ人歴史協会における歴史の再構成」、第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB2「境界地域における愛国主義とナショナリズム」、2014年6月、立教大学(東京)、口頭発表、審査あり。
3	篠原琢「境界地域のナショナリズム——中央ヨーロッパの近代」、本研究プロジェクト「境界地域の歴史的経験の視点から構築する新しいヨーロッパ史概念」(以下、「本研究プロジェクト」と略)第一回研究会、2014年11月、東京外国語大学府中キャンパス(東京)、口頭発表、審査なし。
○4	Taku SHINOHARA, “Authenticity and Originality in Historical Contexts: Experience in Europe and in Japan” <i>Cultural Heritage in Danger</i> , 2015年2月、Turkish Cultural Center (イスタンブル)、口頭発表。
◎5	Taku SHINOHARA, “The East as a Site of Social Experiments: Exclusion of the East from the European ‘Normality’, ” 本研究プロジェクト第一回国際セミナー「Japan Looks at Europe」、2015年3月、中央ヨーロッパ大学(ブダペスト)、口頭発表、審査なし。
6	Taku SHINOHARA, <i>Border Power! Crosscutting Forces at Play in Eurasia, Session II, Moving People around Catastrophe: Incentive and Consequence</i> におけるコメント、2014年12月、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、口頭発表、審査なし。
7	千葉敏之「教皇の地理的身体」、第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB1「回路としての教皇座——13世紀ヨーロッパにおける教皇の統治」、2014年6月、立教大学(東京)、口頭発表、審査あり。
8	千葉敏之「トークセッション「日本におけるドイツ史研究を展望する」、2014年度ドイツ現代史学会第37回大会、2014年9月、駒澤大学駒沢キャンパス(東京)、口頭発表。
9	千葉敏之「書評 藤井真生著『中世チェコ国家の誕生——君主・貴族・共同体』(昭和堂、2014年)」、東欧史研究会2014年度第4回例会、2014年12月、早稲田大学(東京)、口頭発表、審査なし。
10	久米順子「中南米の西洋中世学：非西欧圏における取り組みの一例」、西洋中世学会第6回大会、2014年6月、同志社大学(京都)、ポスター発表、審査あり。
11	久米順子「イベリア半島の中世美術史を考える——その成立と発展、実証的作品研究」、本研究プロジェクト第二回研究会、2015年1月、東京外国語大学本郷サテライト(東京)、口頭発表、審査なし。
○12	Junko KUME, “Dos códices ildefonsianos en el Toledo recién reconquistado: la difusión del De virginitate iluminado dentro y fuera de la Península Ibérica,” 国際会議“Medieval Europe in Motion 2015: Medieval Manuscripts in Motion,” 2015年3月、グルベンキアン財団・ポルトガル国立図書館(リスボン)、口頭発表、審査あり。

13	巽由樹子「19世紀後半ロシアの出版メディアとポピュラー・サイエンス：帝政末期の通史を再考するための事例として」、日本科学史学会第61回年会、2014年5月、酪農学園大学（北海道江別）、口頭発表、審査あり。
14	巽由樹子「帝政末期のロシア語出版と非ロシア人企業家」、本研究プロジェクト第二回研究会、2015年1月、東京外国語大学本郷サテライト（東京）、口頭発表、審査なし。
◎15	Yukiko TATSUMI, “The representation of the Tsar and the representation of the commercial press in late imperial Russia”, 本研究プロジェクト第一回国際セミナー「Japan Looks at Europe」、2015年3月、中央ヨーロッパ大学（ブダペスト）、口頭発表、審査なし。
16	福嶋千穂「17世紀前半リトアニア大公国の殉教聖人ヨサファト」、本研究プロジェクト第一回研究会、2014年11月、東京外国語大学府中キャンパス（東京）、口頭発表、審査なし。
17	福嶋千穂「近世ポーランド・リトアニアの宗派的状況」、東京外国語大学海外事情研究所所員報告会、2014年12月、東京外国語大学府中キャンパス（東京）、口頭発表、審査なし。
18	※伊東剛史・石橋悠人・櫻井綾子・巽由樹子「シンポジウム：19世紀ヨーロッパのポピュラー・サイエンス」（趣旨説明担当）、日本科学史学会第61回年会、2014年5月、酪農学園大学（北海道江別）、口頭発表、審査あり。
19	伊東剛史「ロンドン動物園と科学知の演劇性——1836年のキリン・センセーション」（前掲シンポジウムにおける個別報告）、日本科学史学会第61回年会、2014年5月、酪農学園大学（北海道江別）、口頭発表、審査あり。
◎20	Takashi ITO, “Cruelty in Smithfield: Meat Trade and Animal Law in Nineteenth-Century London,” 12th International Conference on Urban History, September 2014, Lisbon, 口頭発表、審査あり。
21	赤松淳子・※伊東剛史・金澤周作・後藤はる美・高林陽展・那須敬、「シンポジウム「痛みの文化史」」（趣旨説明担当）、イギリス史研究会、2014年10月、明治大学（東京）、口頭発表、査読なし。
22	伊東剛史「近代イギリスにおける「痛み」と「感情」」、本研究プロジェクト第二回研究会、2015年1月、東京外国語大学本郷サテライト（東京）、口頭発表、審査なし。
◎23	Takashi ITO, “An Indispensable Urban Amenity?: Zoos in the Modern World,” 本研究プロジェクト第一回国際セミナー「Japan Looks at Europe」、2015年3月、中央ヨーロッパ大学（ブダペスト）、口頭発表、審査なし。
◎24	Takashi ITO, “Still a Reluctant Patron?: State and Science Popularisation in Victorian Britain,” International Symposium on ‘Popularising Science in the East and West, March 2015, University of Tokyo, 口頭発表、審査なし。
◎25	Rin ODAWARA, “Representing Peace and Justice: Theatres of Memory in Sarajevo and The Hague,” Sarajevo Peace Event 国際会議, June 2014, Sarajevo Peace Event International Coordinating Committee (Sarajevo, Bosnia and Hercegovina), 口頭発表、審査なし。
27	小田原琳「イタリア-バルカン諸国間における歴史的記憶をめぐる論争——Pamela Ballinger, History in Exileを踏まえて」、ボーダーランド研究会、2014年7月、東京外国語大学府中キャンパス、口頭発表、審査なし。
28	小田原琳「近代イタリアにおける地理的／「人種」的境界——イタリアにおける人種主義の系譜」、本研究プロジェクト第二回研究会、2015年1月、東京外国語大学本郷サテライト（東京）、口頭発表、審査なし。

◎29	Rin ODAWARA, “A comment for Pavel Kolar “Beyond the Cold-War Paradigm: Towards a Comparative History of State Violence in Europe after 1945” ,” 本研究プロジェクト第二回国際セミナー「The West and the East in European History」、2015年3月、東京外国大学本郷サテライト、口頭発表、審査なし。
30	鈴木健太「社会主義ユーゴスラヴィアにおける「ナロード」——1980年代末の大衆運動とナショナリズム」、第64回日本西洋史学会大会シンポジウムB2「境界地域における愛国主義とナショナリズム」、2014年6月、立教大学（東京）、口頭発表、審査あり。
31	鈴木健太「コメント 【合評会】高橋和・中村唯史・山崎彰 編『映像の中の冷戦後世界——ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルム・アーカイブ』（山形大学出版会、2013年）」、東欧史研究会2014年度6月例会、2014年6月、大正大学（東京）、口頭発表、審査なし。
○32	Kenta SUZUKI, “ Rethinking the ‘Sarajevo Incident’ : Contemporary Understandings of the Event,” The 20th Century through Historiographies and Textbooks in Japan and East Asia and Slovenia and Southeast Europe, First Workshop, September 2014, Institute of Contemporary History, Ljubljana (Slovenia), 口頭発表、審査なし。
○33	Kenta SUZUKI, “Popular Movements and Nationalism in Socialist Yugoslavia in the late 1980s: A Perspective on the Case of Serbia,” 46th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies (ASEEES), Panel “Aspects of Extremism and Nationalism in Yugoslavia,” November 2014, San Antonio, 口頭発表、審査あり。
34	鈴木健太「社会主義体制末期の民衆運動とナショナリズム——ユーゴスラヴィアからみる東欧革命」、本研究プロジェクト第一回研究会、2014年11月、東京外国語大学府中キャンパス（東京）、口頭発表、審査なし。



## 5. 若手研究者の派遣実績（計画）

### 【海外派遣実績（計画）】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
派遣人数	3 人	5 人 (3 人)	3 人 (2 人)	6 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

### 【本年度の海外派遣実績】

派遣者①の氏名・職名： 巽 由樹子 ・ 講師

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>1 月末にハンガリーに渡航し、中央ヨーロッパ大学歴史学部で客員研究員として研究を進めている。本研究プロジェクト第一回国際セミナー「Japan Looks at Europe」で研究報告したほか、ロシア史を専門とする教授陣と面会し、意見交換した。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>上記の第一回国際セミナー報告“The representation of the Tsar and the representation of the Tsar and the commercial press in late imperial Russia”（2015 年 3 月 9 日）</p>				
派遣先 （国・地域名、機関名、部局名、受入研究者）	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、歴史学部、バラージュ・トレンチャーニイ准教授	61 日	183 日	80 日	324 日

派遣者②の氏名・職名： 福嶋 千穂 ・ 講師

<p>（当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>クラクフでの調査テーマは、近世ポーランド・リトアニア領ルーシ地域における合同教会（東方典礼カトリック教会）の成立・発展とラテン化の問題である。より個別的な事例として、グレゴリウス暦導入、東方典礼修道会（バシリウス会）の設立、聖人崇拜の問題を念頭に置いている。またクラクフはポーランド分割後にオーストリア統治下に入った地域であることから、近代以降のハプスブルク帝国における東方典礼カトリック教会の発展についても、ガリツィアにおけるポーランド人とウクライナ人の関係史を踏まえつつ、基本的な研究状況を把握しておきたい。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>渡航から一か月を経た現在は、派遣先である国際文化センターにおいて教会合同に関連するポーランド語史料の翻訳作業を行うほか、ヤギェウォン大学歴史学研究所の蔵書を使用し先行研究を調査している。</p>				
派遣先 （国・地域名、機関名、部局名、受入研究者）	派遣期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
ポーランド、国際文化センター、ヤツェク・プルフラ教授	33 日	327 日	0 日	360 日

派遣者③の氏名・職名： 鈴木 健太 ・ 日本学術振興会特別研究員PD

(当該若手研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動)

20世紀終盤の社会主義体制崩壊における国民主義の力学に関して、ユーゴスラヴィアの経験を中心に再検討し、東部境界地域の体制変動をヨーロッパ史の文脈のなかに位置付けることをめざす。以上を主たる課題に、本年度3月末から、中央ヨーロッパ大学歴史学部にて客員研究員として研究を進める。

(具体的な成果)

渡航後、受入研究者との面会等を通じて、向こう1年に渡る研究活動の基盤づくりを進めつつ、派遣先の史資料状況の調査を中心に研究に着手した。

派遣先 (国・地域名、機関名、部局名、受入研究者)	派遣期間			合計
	平成26年度	平成27年度	平成 年度	
ハンガリー、中央ヨーロッパ大学、歴史学部、バラージュ・トレンチャーニイ准教授	8日	297日	0日	305日

※本年度の派遣者毎に作成すること。

## 6. 研究者の招へい実績（計画）

### 【招へい実績（計画）】

年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	合計
招へい人数	2 人	5 人 (2 人)	5 人 (4 人)	6 人

※当該年度は実績、次年度以降は計画している人数を記載

### 【本年度の招へい実績】

招へい者②の氏名・職名：Prof. Pavel Kolář・教授

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>ヨーロッパ現代史、とりわけ冷戦期の歴史を東西にまたがって叙述する枠組みの構想を方法論的、概念的に発展させる中軸となる。また、欧州大学院大学と東京外国語大学との研究者循環に中心的役割を果たす。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>東京外国語大学において行われた国際会議において、パヴェル・コラーシ氏の報告は、ヨーロッパ史概念から「東」がもっとも疎外された冷戦期について、死刑制度に注目しながら、国家暴力の行使という観点から考えた場合の、「東」を有機的に包括したヨーロッパ史叙述の可能性を提起した。これらの報告は、本プロジェクトを進める上で、本質的に重要な貢献となった</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
欧州大学院大学、歴史・文明学部、イタリア 東京外国語大学	5 日	1 日	12 日	18 日

招へい者⑥の氏名・職名：Prof. Matthias Riedl・教授（学部長）

<p>（当該研究者の国際共同研究における役割を含めた具体的な研究活動）</p> <p>ヨーロッパ中世、近世におけるヨーロッパ史概念を政治思想史研究に即して解明する。中央ヨーロッパ大学と東京外国語大学との研究者循環に中心的役割を果たす。</p> <p>（具体的な成果）</p> <p>東京外国語大学において行われた国際会議において、マティアス・リードル氏の報告は、中近世の政治思想史に即して、ヨーロッパ史における「西」の意味づけを明らかにした。現実には 13 世紀までビザンツ世界は、西欧に対して文明的・知的に圧倒的な優位に立っていたにも関わらず、宗教的普遍性を代弁する帝國的政体が、その領域的限定性（「西」）を普遍性に投影したのである。報告は今日まで続くヨーロッパ概念の構築の持続性を示した。</p>				
招へい元（機関名、部局名、国名）及び 日本側受入研究者（機関名）	招へい期間			合計
	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	
中央ヨーロッパ大学、歴史学部、ハンガリー 東京外国語大学	6 日	2 日	12 日	20 日

7. 翌年度の補助事業の遂行に関する計画

※ 補助事業が完了せずに国の会計年度が終了した場合における実績報告書には、翌年度の補助事業の遂行に関する計画を附記すること。